

B 19 履物設計の爲の足部計測（第3報）—高齢層女子の場合—  
福岡女大家政 山本昭子

目的 現在60歳以上の高齢層女性は、日本女性の服装が和式から洋式へと移行する過渡期の世代であり、この世代の足型調査は足部形態に履物がどのような影響を及ぼすかを知る手懸になると考え、足部計測と共にアンケート調査を行い報告するものである。

方法 60歳以上の健康な女性218名について、足部計測及び履物に関するアンケート調査を行い、各々の結果を統計学的に処理し、主として女子若年層\*との比較により考察した。計測項目及び方法は女子若年層の場合と同様である。

結果 ①現在革靴を常用している者は47.7%、靴に対して不満のある者は64.2%で、最も多い不満は「幅が狭すぎる」52.1%であった。②各計測項目の身長及び体重に対する比は、ほとんど若年層より優れており、身長・体重に比して足部寸法が大きい。③足部の各計測項目の足長に対する比はほとんど若年層より優れており、高齢層ほど足長に比して足の周径が大きい傾向がみられる。④足蹠形状の母趾角は、若年層同様6~10度が最も多いが16度以上では高齢層の方が多い。また母趾角と足先の重心の位置は $r=0.71$ と深い相関を示し、母趾角が大きいほど重心は外側に位置する傾向がみられる。⑤実測による足長が大きいほど「自給靴サイズ-足長」値は減少傾向を示すが、マイナス値を示す人は若年層と異なりほとんどいない。⑥JISへの適合率は、51サイズで98.1%であるが、若年層より広い足囲サイズでの出現率が高く、同一足長では、若年層と比して足幅は6mm広くしたものと設定する必要がある。

\*山本他：日本家政学会第36回年次大会研究発表要旨集，129（1984）